

国内経済情勢

概 観

設備投資の増勢が強まり、個人消費も堅調を維持するなどこのところ民需の盛り上がりが目立ちはじめ、このような需要増加を背景に、昨秋一時鈍化を示した生産は再び高いテンポの増勢を示している。また商品市況の面でも、鉄鋼、繊維の主力商品が急伸して地合いは一段と堅調を呈し、卸売物価の騰勢も強まっている。

以上のような経済の拡大に伴い、昨秋ごろから財政資金対民間収支が次第に揚げ要因を強めており、銀行券の増勢と相まって金融市場はこのところ小締まりぎみとなっている。ただ、この間、大企業の借入需要の基調には目立った変化は生じていない。

12月の国際収支は、貿易収支の大幅黒字により総合では相当の黒字を記録したが、これには輸入が食料の減少からかなり低目となっている事情もあり、ならしてみれば昨秋来の貿易収支の黒字幅縮小という状況は続いているようである。

設備投資の増勢強まる

鉱工業生産(季節調整済み)は、11月に前月比+2.1%と大幅の増加を示したあと、12月(速報)も+1.5%増加した。この結果、41年中の生産は前年比+11.7%と前回景気上昇期の38年中の伸び率(+10.1%)を上回る勢いをみせており、とくに年央以降拡大テンポは一段と強くなっている。12

月の生産を財別にみると、とくにボイラーおよび原動機の急増や風水力機械、化学機械など設備投資関連機種が増加から一般機械が目立って増大し、また建設資材、生産財もかなりの増加となった。

一方、ここ一両月増勢が強まっている鉱工業出荷(季節調整済み)は、12月の速報で前月比+1.2%と引き続き相当のテンポで増加し、41年中の伸び率は+12.0%と生産の伸びとほぼ同率となった。

12月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比-1.1%と10月来の減勢を持続した。財別には、輸送機械、非耐久消費財が多少増加したが、生産財は引き続き減少している。こうした状況から、製品在庫率も前月比-2.3%とさらに低下し(106.6)、36年10月以来の低水準となった。原材料在庫や販売業者在庫については、一部に多少積み増しに向かう気配もうかがわれるが、目下のところ、増加の程度は比較的緩慢なようである。

一方、設備投資については、鉄鋼、自動車などで当初の計画を大幅に増加させようとする企業が目立っているほか、好調業種で設備増設の動きが徐々に広がっている。これは、資本財出荷、機械受注、建設受注などがこのところかなり顕著な増勢を示していることにもうかがわれ、たとえば、機械受注(海運・電力を除く民需、季節調整済み)は、10月+17.9%、11月+15.9%と増勢が続いたあと、12月にはさらに+33.1%と大幅な増加を示している。

なお、労働力需給は引き締まり傾向を強めつつあり、求人に対する求職の倍率(季節調整済み)は、11月には1.1倍とついに過去の最低水準まで低下した。

商品市況は一段と堅調、卸売物価の騰勢目立つ
 昨年末から本年初めにかけての商品市況をみると、鉄鋼では条鋼類が異常な急騰を示したほか、鋼板類の騰勢も強まり、繊維でも綿糸が急伸し、他の繊維もこれに追随する動きをみせるなど、主力商品がそろって堅調を呈した。このほか、セメント、基礎薬品類、木材、非鉄(鉛、亜鉛)など引き続き上伸ないし堅調の度を加えている商品が多く、全体として市況の地合いは一段と強くなっている。これは最終需要がかなりの増加を示しているという基本的な事情に加え、鉄鋼、非鉄、セメントなどにみられるように、供給余力がかなり縮小していることもその有力な一因となっている。かかる事情がまた企業の設備投資意欲を促す大きな背景になっているといえる。

もっとも、一部の商品では、その市況急伸に人气的要素が多少からんだ面もあり、現に、ごく最近、形鋼、スプ糸、生糸などは若干訂正安の動きをみせている。

このような情勢を映じ、12月の本行卸売物価は前月比+0.2%の続騰を示し、更年後も1月上、中旬ともそれぞれ前旬比+0.6%と高いテンポの騰勢が続いている。なお、非鉄、食料を除いてみると、12月+0.5%のあと、1月上、中旬にはそれぞれ+0.8%と騰勢が一段と強まっている点は注目を要する。

一方、消費者物価(東京)は、12月には前月比+0.8%の上昇となり(年平均では前年比+4.8%)、1月も食料の値上がりが響いて+1.5%と大幅に

続騰した。季節商品を除いてみると、12月+0.4%、1月+0.2%と小幅ながら根強い上昇が続いている。

財政資金の揚げ要因強まる

12月の銀行券は、季節的にかなりの増発となり(5,042億円、前年同月4,563億円)、他方、財政資金は公共事業関係費の支払が前年同月以下にとどまったことや、租税、郵便貯金の受入れ増大などから、払超額は1,716億円と前年(2,620億円)を大幅に下回った。このため、市場の資金不足はかなりの額に上ったが、本行は政保債の買入れや政府短期証券の買戻しを実施したほか、貸出についても弾力的な態度で臨んだため、金融市場は比較的平穩に越年した。

更年後の動きをみると、銀行券は季節的に大幅還流(3,852億円)を示したが、消費の堅調などを背景に、月平均発行高の前年比増加率は+14.7%と引き続き高水準で推移しており、また、財政資金対民間収支では季節性も加わって揚超傾向が一段と強まっている(4,509億円の揚超)。このため金融市場はこのところ小締まりぎみとなり、月越物コール・レートは下旬には5毛高となった。

12月の全国銀行勘定をみると、実質預金増加額が前年同月比+4%と伸び悩んだ一方、貸出の増加額は前年同月を28%上回り、依然として増勢が続いている。このため、銀行、とくに都市銀行の資金ポジションはこのところ悪化傾向をたどっている。当月の貸出増加は中堅・中小企業を中心に季節資金などの借入需要が根強い増加を示したためとみられるが、同時に、年末を控え、金融機関が預金増強とのかね合いで貸し進んだことも見のがせない。この間、大企業では、さすがに大口返済がほぼ一巡したほか、鉄鋼、石油精製、化学な

どで多少の動意もみられはじめているが、資金調達面における自己資金の比率が高まっていることや、企業の手元が、保有現預金の売上高に対する比率では低下しているものの、なお余裕含みに推移していることなどもあって、目下のところ借入需要の基調には目立った変化はうかがわれない。このため貸出金利は低下傾向を続けている。

公社債市況は、若干の小動きはあるものの、大勢保合いで推移している。

総合収支は季節的な関係もあり、3ヵ月ぶりにかなりの黒字を記録

12月の国際収支(IMF方式)をみると、長期資本収支が輸出延払い信用供与の増加などから赤字幅をさらに拡大したが、経常収支が貿易収支の好調(382百万ドルの黒字)にさきえられて大幅な受超(273百万ドル)となったため、総合収支では78百万ドルの黒字となった(前月は27百万ドルの赤字)。なお、金融勘定では、為替銀行の短期資産・負債バランスは輸出手形の買持ち増を主因にかなり好転し、また外貨準備も30百万ドル増加した。

貿易収支の黒字幅は季節調整後の実勢でも10月、11月のそれを若干上回ったが、12月の輸入が食料の一時的減少によってかなり少なめとなっている事情もあるので、ならしてみれば昨秋来の貿易収支の黒字幅縮小という状況は改善されていな

いように思われる。

12月の輸出は、前年同月比では+25%とかなりの増加となったが、これには前年同月の水準が海員ストライキの関係でとくに低かったことが響いており、季節調整後の実勢では船舶輸出集中の反動もあって前月に比し若干減少している。通関ベースで品目別の動きをみると、船舶、民生用電機、自動車、合繊織物などは相変わらず好伸しているが、反面、鉄鋼や綿織物は依然不ぞえ裡に推移している。なお12月の輸出信用状は、季節調整後の実勢では前月よりやや増加したが、前年同月比で見ると、伸び率は鈍化しており、品目別には、主力の鉄鋼が、また市場別には、大宗を占める米国向けが、いずれも停滞ぎみとなっている点は見のがせない。

一方、12月の輸入は、前年同月比+19%、季節調整後では前月比-9%と、ここ数ヵ月来の増勢は一服となった。これは、主として、食料が前月急増の反動もあって著減したことによるもので、鉄鋼原材料、木材、石炭などの原燃料輸入は根強い増勢を続けている。先行指標をみると、全体としては横ばいぎみに推移しているが、そのなかで原燃料は増加を示している。なお8月以降低下を続けてきた輸入素原材料在庫率は、11月に若干回復した。

(昭和42年2月3日)